

松田英二：希望農場を築いた植物学者

村上, 貴弘
九州大学持続可能な社会のための決断科学センター：准教授

<https://doi.org/10.15017/1792173>

出版情報：決断科学. 2, pp.54-60, 2016-12-31. 九州大学持続可能な社会のための決断科学センター
バージョン：
権利関係：

松田英二…希望農場を築いた植物学者

村上 貴弘

保全生態学・社会生物学

国と国との関係という点、人はとかく大きな枠でとらえがちだ。

しかしながら、実際にその関係性を構築するのは国が作った制度だけではなく、そこに暮らす人々との直接の交流から生み出され、醸成されるものでもある。

メキシコに滞在してみると、メキシコ人の日本人に対する印象というのは非常に良く、まさに「親日国」といっていいだろう。これは、もちろん前項で解説したように、榎本植民団をはじめとした国の政策のためかもしれない。だが、個人の高い志による国際貢献によって、国の評価が上がることもあるのだ。

その一例が、植物学者松田英二氏の生涯である。

松田英二氏は1894年（明治27年）4月20日に長崎県長崎市に医家の息子として生まれた。1894年という年は日清戦争開戦の年で、日本は明治維新後、近代国家を目指した政策を打ち出し、海外の国々との関係をようやく構築しようかという時期であった。人口は増加の一途をたどり、その当時すでに4000万人を超えていた。一般市民は貧困や食糧不足などに見舞われ、社会不安の種となっていた。

松田氏は、旧制長崎中学卒業後、医者を目指すに日本を飛び出して、台湾総督府国語学校に学び、国語矯正官

として現地の日本語の発音指導を行った。

同時に、総督府博物館に通い、相馬禎三郎教授および早田文蔵東大教授から手ほどきを受け、植物生理および分類学の基礎を修得した。

国語教員として台湾を巡回中に、現地日本人の風紀の乱れに憤慨し、新聞に告発記事を投稿したことがきっかけで、民政長官に認められ、新教育（開発主義）による小学（8年制）および中学農学校を創設し、各校長事務および理科教育を担当して大正10年7月（1921年）まで台湾での教育活動に従事した（内田1978^{※16}）。

台湾滞在時の活動の中でメキシコでの活躍に重要な二つの要素を身につけていた。一つが植物学。もう一つが教育である。この二つの要素は、彼の出身地である長崎市という環境が深く関わっている。長崎市は、日本では唯一江戸時代も海外と貿易を行っていた土地であり、数百年もの間キリスト教の教義が浸透していた地域であった。

ここまで文章を書いていて驚いたのが、松田氏もメキシコとゆかりの深い長崎の出身であったという事実である。長崎市にはメキシコとの関係を考える上で重要な「26聖人殉教の地」である西坂公園や大浦天主堂などメキシコとキリスト教ゆかりの場所が数多くある。長崎とメキシコと九州大学・決断科学センターとの繋がりをことこまかに説明しても興ざめなので省略するが、私たちの活動とメキシコとの「縁」の深さに我ながら感銘を受けている。

松田氏は長崎にいた頃から、無教会キリスト教の内村鑑三氏（北大出身で東京在住ではあったのだが、どうやって弟子になったのだろうか？）の弟子となり、以下の言葉を信奉しながら、若き日々を過ごしたという。

「読むべきは聖書、なすべきは労働、きわむべきは天然」

私は、キリスト教に明るいわけではないが、この言葉は特定の宗教を超えて、説得力をもつ。勉学を忘れない向上心、労働を中心とした勤勉な態度、そして自然から

※16 内田重雄（1978）植物学者松田英二博士の業績とその経歴、熱帯農業、2: pp. 112-113.

多くを学ぶこと。これら3要素は、現代でも人間の行動規範を考える上で必須の要素になるのではないだろうか。

松田氏は、この言葉を心に秘め、台湾で教育活動に勤しむとともに、台湾の植物採集を休みのたびにに行った。また南方熊楠博士と協力して、台湾における粘菌の研究を分担して行ってもいた。

松田氏のメキシコへの渡航は、ロマンにあふれた動機であった。田園詩人ソロー（アメリカの田園詩人1817-1862）の生活に憧れ、教員生活から自然の中の生活を目指したのだ。資金は、台湾時代に調査・研究を行い、その研究成果を「蕃地のクスノキ調査」として発表し、賞金1万円を獲得した。1920年代の1万円は2016年の日本の価格基準で換算すると約4000万円にも相当する。この当時、植物調査にこれほどの資金が投入されていたことに驚くが、松田氏が教育だけでなく、植物学においてもすでに一流であったことを示しているだろう。

この資金を元に、友人であり内村鑑三門下生だった清される襲撃を松田氏は追い払ううちに、草賊団の悪党2名と知り合いになり、直接団交を行い、被害を徐々に軽減にしていっていったという（村井1969^{*1}）。

現代の日本での生活からは想像もつかないほどの荒唐無稽な話である。草賊団と直接団交というのはいったいどういう段取りで行われるのだろうか？究極の合意形成であったり、教育活動であったことだろう。

このような治安の悪さの改善と西洋文化に押しつぶされてしまった土着のメキシコ民族の誇りを取り戻すためにも、松田氏は農場開設間もない、まだ草賊団が跳梁跋扈しているさなかに、自らの資金で台湾と同じく学校を建設し、青少年教育に打ち込み、地域の治安を安定させ、識字率の向上を果たした。その結果、地域の青少年の教育レベルを少なくとも中学卒業レベルまでに引き上げていったのであった。

これらの教育活動は基本的にはキリスト教を基礎になされた。聖書の講読は、はじめは数名で始まったが、や

水繁三郎氏、池田福司氏とともにメキシコ移住を決意した。

松田氏28歳の夏のことであった。

松田氏は台湾での公職をすべて辞め、4ヶ月にわたり香港、シンガポール、マニラ、ジャバの植物研究所を訪れた後、1922年（大正11年）12月にメキシコに渡航。メキシコ南部のチアパス州エスクイントラ町の旧榎本植民地にあるエスペランサ農場に入植した。この農場は、もとは高田政助が拓いた約550ヘクタールの広大な農場であった。松田氏、清水氏、池田氏はこの農場を買い取り、ソローのような田園生活を目指しながら、キリスト教精神に基づく理想郷の建設を目指した。

榎本植民地に関しては前項の古川氏の論考を参照されたい。

農場開設当時は、メキシコ革命の余波もあり治安が著しく悪化している時期であった。幾度も山賊ではなく「草賊」に襲われた。盗賊団はコーヒー豆を入れる麻袋を持ち、農場に侵入し、家財道具や貴重品いっさいがっさいをその麻袋に入れ、盗んでいったという。幾度も繰り返

がて100名を超える生徒が勉学に励み、27年間で2000人以上が卒業した。その中にはのちに議員となりメキシコを支える人材になった者もいるという。

第二次世界大戦時、松田氏はチアパス州を追われる立場となるが、彼が拓いた独立系キリスト教会は存続し、チアパス州における他の在留日本人に対する特別優遇措置も、松田氏の切り拓いた学校教育の業績によると考えられる。

話を少し戻すと、チアパス州に入植後約10年で、農場経営が安定し、松田氏は念願の植物研究に没頭し始める。まずは、農場周辺の植物相調査から始め、徐々にその範囲を拡大していった。その大きな成果は数年後の1934年3月に報告された。

台湾での日本語教師時代に収集していたヤッコソウという希少な植物をメキシコ南部でも発見したのだ。

このヤッコソウという植物は非常に奇妙な生態をしている。地球上には1属2種しか生息していない。1種は高知師範学校の山本一氏が1907年（明治40年）に同県幡多郡加久見でシイノキの根に寄生している乳白

*17 村井謙一（1969）バイオニア列伝、pp.131.

色の奇妙な植物を発見し、東京大学の牧野富太郎博士により熱帯地方に生息する世界最大の花をつけるラフレシア科の新属新種の植物であることが判明した。牧野博士は発見者の山本氏の名前を記念して *Mitrasemon yamanotoi* と命名した。

ラフレシア科は分類学的には議論の多いグループであった。生態的に見ると寄生種が多く、一つの科ではあるが多系統であろうと考えられていた。しかし、2004年にミトコンドリアDNAの二つの遺伝領域の塩基配列を使って分子系統樹を作成したところ、ヤッコソウはラフレシア科とは遠縁で、ツツジ目に属し、独立したヤッコソウ科を形成していることが明らかになった (Nickrent et al. 2004^{※18})。

ヤッコソウ1属2種のうち、もう1種の種名は *M. matudae* という。そう1934年3月松田氏がメキシコ南部で発見した新種である。

ヤッコソウは希少種で、葉緑体を持たず、したがって

※18 Nickrent DJ, Blarer A, Qiu Y-L, Vidal-Russell R, and Anderson FE (2004) Phylogenetic inference in Rafflesiales: the influence of rate heterogeneity and horizontal gene transfer. *BMC Evolutionary Biology* 4: 40-57.

じたようである。

10カ年計画でメキシコ南部の生物誌を編纂するという松田氏の野望は、しかしながら途中で潰えることになった。

プロジェクト開始から4年が経過した1941年12月。調査・研究からアメリカ人研究者たちが帰国するまさにそのときに、日米開戦となった。メキシコは連合国としてアメリカに協力し、日本と敵対関係になってしまった。

松田氏のプロジェクトは頓挫し、エスペランサ農場も縮小させられてしまった。さらに1945年6月、農場はメキシコ政府の敵対管理下におかれ、松田氏はチャパス州から撤退を余儀なくされた。地元の住民は松田氏の移住を心から惜しみ、州政府はその後の日本人に対して特別の保護を加えることとなった。

チャパスを離れた松田氏はメキシコシティに移住。そこで待ち受けていたものは、予想外のものではあった。

メキシコ国立自治大学 (UNAM) 理学部教授として迎えられ、正規の研究者としてメキシコの植物学の発展

光合成はできない。生活史は全寄生植物で、おもに森林のシイノキなどの根に寄生する。松田氏が台湾とメキシコでヤッコソウを発見したことの何が貴重であったのか。

それは、旧熱帯と新熱帯という地理的にかき離れた地域で、希少な植物が不連続的に分布していたという発見だ。それまでの植物学の常識では、ヤッコソウのような個体数の少ない種は、ある特定の地域に飛び飛びに分布するものの、大陸をとびこえて分布することは考えられていなかった。

松田氏はこの発見により、植物学の常識を一つ覆し、一躍世界的に名を知られる存在となった。

1937年、松田氏はミシガン大学、イリノイ大学、フィラデルフィア大学、ニューヨーク博物館の若い生物分類学者とともに3ヶ月から6ヶ月の間、命がけて多くの標本を収集し、分類をしていた。メキシコ南部はその当時まだ生物分類学者が未踏の地であり、生物多様性の高い地域でもあり、松田氏のみならずアメリカ合衆国の若き研究者たちも高い志でこのプロジェクトには参加

にその後も尽力する機会を与えられたのだ。メキシコの国としての方針と大学の松田氏に対する処遇は相反するものであるが、まさに「自治大学」としての面目躍如である。

UNAMの定年は70歳であったが、松田氏は総長の意向により特別に84歳まで教授として活動された。

現役の研究者として参加した1978年ブラジリアで開催されたラテンアメリカ国際学会の帰途、ペルーのリマで狭心症のため急逝された。享年84歳であった。

84年間の生涯で、学校教育により2000人以上の卒業生を送り出し、メキシコをはじめとした中南米の植物・動物相調査により植物界6属の新属発見、800種以上の新種の発見、60万点以上もの植物標本、4000点以上の鳥類・ハ虫類・昆虫標本を残している。チャパス州エスクイントラにはエスペランサ農場 (スペイン語で「希望」という意味だ) と松田植物研究所、メキシコシティからモレリアに行く途中にあるトルーカ市には松田氏が設計した非常に端正な植物園、そしてメキシコシティの UNAM には松田氏が設計に関わった植物

園と膨大な量の標本が保管されている。

参考文献・史料

私たちの実習では、UNAMの植物園と標本庫のみを視察したにとどまっているが、今後トルーカ市の植物園、チアパス州の研究所と農場に是非とも視察に行くとともに、標本の整理、公開や松田氏の業績をまとめて公開していくことで日墨関係史をあらためて見直す契機としていきたい。

現在、日本でもメキシコでも松田英二氏の名前を聞いたことがある人は少ないかも知れない。かくいう私も、実習に参加するまでは松田氏の名前を知らずにいた。しかし、良好な日墨関係を築けている現在の状況の礎となったのは間違いなく松田氏のような高い志と勤勉な心、そして自然に対する尽きせぬ好奇心こそであろう。これからも日本からこのような大いなる人が育っていくことを、そして自らもそのような人材になっていけるよう努力していきたい。

日本人メキシコ移住史編纂委員会「日本人メキシコ移住史」、pp. 430, 1971.

松田英二「南メキシコに遺された日本人の足跡」、玉川大学出版部、pp. 22, 1966年。